

白川村木谷出身某女、現在五十七歳。

彼女は木谷の某家の家長の長女の娘に生れた。だから、傍系ながら、家長の孫娘に當るわけである。現在は平瀬(やはり大家族部落)出身の某氏の妻になつて高山に住んでゐる。

彼女が十八の時、いまの夫の家のものがやつてきて、町に出てゐる男に、誰か嫁を貰つてやらねばならぬと云うやうな話をした。それを聞いてゐたヲバたちが、半ば冗談らしくかう答へた。

「あゝ、女房なら(女の意)いくらでも居るで、やるぜ」

間もなく、その男が自分の家長と一緒にやつてきて、町にゐるみうちのものに彼女をほしいと申出た。それから家中のものが、大きな圍爐裏をぐるりと取まいて、相談した。すると、前にはやつても良いやうな口ぶりを漏らしたヲバたちまでが、

本気で反対した。

「女は決してよそへ出すもので無い」と云ふのであつた。

そこでこの縁談は結局ことわつてしまつた。ところが、彼女の母親は、自分の送つてきた女としての辛い生活を良く知つてゐた。そして他國のやうに娘を嫁にやれるものなら嫁がせたい。世の中は段々變つてきて、白川でもいつかは、よそのやうになる。その時娘が可哀さうだ、とさかしくも考へてゐた。それで娘の父親に相談してみたが、彼は自分の娘であると言つたところ、實際的な支配権はちつともない。だからはつきりしたことは云へなかつた。

最後に母親は彼女の意嚮をきいた。それまでに彼女は、町へでも出て奉公しようかと漠然と考へてみぬでも無かつた。しかし、いかに嫁に行くのにせよ、この際村の古い習俗と一同の反対を押しつけて出て行くといふ事になると、十八の小娘には決

心ができかねた。母親はそれをみると、かう言ひきかせた。

「こゝにゐたつて、子供の二人もバツドリ（大蓑）の下に挟んでをつて、畑仕事ぢや何ぢやと苦勞せにやならんで、町へ行く氣があるんなら行つた方が良えぞ。」

かくて母親は娘に嫁にゆくことを承知させて、家のババやヲバに改めて頼んでみた。女たちの返事はかうだつた。

「逃げて行くものは仕方がないで。」

それから間もなく、母親は夜中に起きて、娘のために特に白い飯を焚いて、辨當を作つてくれた。そしてまだ暗いうちに村を立たせた。身近なヲバが二人起きてきて、何かと世話を焼いてくれた。ババは親身の孫のことだつたが、習慣上公然と見送ることもできないので、寢間から出て來なかつた。

その時の彼女の持物と云つては、木綿縞の綿入一枚、ガス縞珍と綿縞子の腹合せ

帯一本それに木綿のドーマリ（大人の袖無し）が一枚にすぎなかつた。これが十八歳で嫁入る娘の支度の全部だつた。これだけでもその母親が長年の間働きぬいて貯めたシンガイで買つてやつた品々なのである。家から毎年一枚づつ貰つてゐたナツギは全部家に残してきた。

それは日露戦争の後間もないことで、彼女の家には當時まだ二十七八人の人々がゐたと云ふ。

白川村御母衣出身の女、明治三十一年生れで、遠山家の分家の娘。

彼女の小さい頃にはもう小學校へ通ふことになつてゐた。小學校を卒業する時、他國から來てゐた受持の先生が次のやうに話してきかせた。

「お前にはちやんとした父親も無いのだし、村にゐるとロクな事はないから、町

へ出て女中奉公なりして、まじめに勤めあげるやうにするが良い。」

この言葉はさかしい彼女の心にしみた。そして町へ逃げ出す決心をして、機会を狙つてゐた。十五の春、その用意に身のまはりのものを取まとめて、馬小屋の藁の中へ隠して置いた。ところが、あやにく母親に見つけられて、ひどく叱られた。翌年の春彼女は高山へ祭見物にゆく同勢の中へ加はることが許された。彼女は高山へ行つたら、二度と村へ戻らぬ決心だったので、目立たぬやうにできるだけ自分の品々を背負つて出た。見送りに出た村の女たちが

「あの子はえらい荷が多いが、村へ戻らぬのではあらまいか、」と噂し合つたと云ふことを、後年彼女が村へ遊びに歸つた時にきいたと云ふ。彼女は町に残つて、某家へ奉公してゐた。それを知つて、母親がわざ／＼迎へにやつてきたが、娘の堅い決心をきくと、つれ戻すことを諦めて、奉公先の主人に娘のことをよく頼んで置いて、村へ歸つた。

大正四年のことだつた。

白川村木谷出身の女、現在八十一歳。最初に掲げた現在五十七歳の女の母親。

彼女の家は、どちらかと云へば、生計があまり裕かで無かつた。男と女と二人の子供をもつてゐた。しかし、大家族の習慣に従つて、夫にあたる男とはそれ／＼別居してゐた。それでもこの二人の夫婦関係は堅いもので、子供の養育費は彼女の責任になつてゐたが、夫も何かと手傳つてゐた。彼女は典型的な大家族の女の暮らしをしてゐたのである。

明治三十八九年頃、上記のやうに、彼女は自ら進んで十八の娘を町へ嫁づけた。それと前後して、彼女の長男も村を逃亡して、町に住むやうになつた。大正三年頃

長男が町で嫁をもらつて一家を構へた。そして彼女をもよんだ。そこで彼女は始めて大家族を離れて町へ出てきて、長男と一しよに住んだ。つゞいて長男の父親、すなはち彼女の夫も町へ出てきた。そしてそれまで別居してゐた老夫妻は初めて同棲生活に入つた。

大正十年頃、老夫妻は再び白川村へ戻つたが、再び大家族へは入らなかつた。大家族へ入るとすれば、また元のやうに別居して、それぐゝの家に入らねばならぬ譯になるのである。彼等は木谷部落の對岸の山で、山小屋に住んで、炭焼をして暮してゐた。五六年前に夫が死んだので老婆は町へやつてきて息子の家にある。もう八十になつてゐても、畑へ出たり、繭分けの日雇に出たり、孫の守をしたり、一日もぼんやりと暮らしてはゐない。そして年に一二度お盆やお祭の折に、生れた部落を訪ねることを何よりの楽しみにしてゐる。

この老婆と息子は、今では父方の性を名乗つてゐる。しかし彼女も息子も、木谷へ行つた時は、父方の家へは行かないで、生家の方へ落つく。家といふ感情はやはり母方に對してのみ抱いてゐるらしい。

今日の若いものはもはや別であるが、中年をすぎたものは、假令村を離れて町に住んでゐるものでも、死ねば母方の墓地に葬られるものときめてゐるし、またそれを希望してゐる。かうした心理と感情は、大家族部落を出てきたおほかたの人々に共通してゐる。

なほこの章を終るに當つて、一つの事が注意にのぼる。私がいろ／＼調査してゐるうちに氣のついた事であるが、大家族での家族員の出入の問題については、女たちが想像以上に干渉する権利を持つてゐたらしいことである。逃亡のいろ／＼な經



白川村奥地

一九二
験をきいてゐる中にも、「ヲバが承知しなかつた」とか、「女どもが止めた」といふやうな言葉が幾度かあつた。それに對して、家長が云々といふやうな言葉は殆んど聞かれなかつた。しかしこれは相當大事な問題なので後日もつとよく調べてみたいと考へてゐる。

(挿畫の寫眞は、白川村の奥地、加順良の娘たちが、谷川でイワナを漁つてゐるところ)

町の女たち

これまで私は、山村の女たちの生活ばかりを書いてきたので、これから町の女たちのことを少しばかり書いてみよう。

現在、飛驒には町と云へば高山を初め古川、船津、小坂、萩原、下呂と、つまり一市五町がある。しかし昔から、この地でひと口に町と云へば高山のことだつた。高山はいま人口やうやく三萬餘、市政になつたのがやつと昭和九年秋のこと、だから昔の人には今でも市なぞと云ふより、町と呼ぶ方が親しみ深いぐらゐである。飛驒の中央部のまつたく深い山また山の中に、宮川にまたがつてぼつりと存在する小

さい都會にすぎぬが、元來が城下町として發達してきたところで、すでに四百餘年の歴史をもつてゐる。従つて、これまで幾度かの大火で焼かれたにかゝはらず、整然とした町並は、いかにも古雅で落ちついたしつとりした趣がある。東山には古い寺々がつゞき、宮川のはとりには柳の巨木が清い流に臨んで青々としたれ、水は到るところに美しくさんくと溢れてゐる。小京都の名のあるのももつともと思はせる。しかも、こゝでは、東の國境に飛驒山脈——いはゆる北アルプスが夏は濃藍色に、冬は白く輝いてゐるのが眺められ、西の國境には遠く加賀の白山が聳えてゐる。だから、殊に秋のよく晴れた日の夕など、赤々とした夕日が白山の彼方に落ちて行きたながら、飛驒山脈の連峯を赤に、紅に、紫に、緑に染め出す光景はこゝならでは見られない美しい、すばらしい、壯嚴なものである。

近年、殊に鐵道がついてから、高山の町はひどく現代化したと云はれる。それは事實である。何も高山だけが他から孤立して、純然たる別世界を作つてゐるわけでは無いのだから。しかし、私どものやうに東京から移つてきたものゝ目には、高山はその新しげな外觀にもかゝはらず、依然として古い町としかうつらない。事實、こゝには、習俗と傳統の上に昔ながらの封建的な遺風が多く、人情も従つて素朴で争ひ事なぞ到つて少ない。春秋のお祭には、家々の出格子にすだれを下げ、華麗な屋臺(山車)を二十臺も引き並べ、氏子たちはそれごとくに一文字笠、紙緒のわらざうり姿で神輿を警護して町をねり歩く光景は美しいものである。また吉忌に際しては、どんな小さい家でも、出格子にすだれを下げる習俗なども、もう都會では忘れられてゐるものゝ一つであらう。

こんな風であるから古い身分觀念もやはり相當に強固で、上層には十軒足らずの旦那衆があり、彼らはその古い家柄と財産によつて町の尊敬を受け、多くの出入

をもつてゐる。その夫人は、オカッアマと呼ばれ（オカッテサマの轉化だらうか）、幾たりかの召使をつかひ、ごく近年まで町を歩くにはきつと女中をお伴につれて歩いてゐた。さう云ふ家の娘たちも勿論のことで、下女か下男の送り迎へなしには外を歩くといふことが無かつた。古風な傳統にあくまで忠實で、年中行事を一々きちようめんに行行ひ、家々との交際、出入のものとの關係などやかましく型どほりに實行するものは、やはり旦那衆だつた。従てそれが町一般の氣風ともなつてゐた。

今では殆んど跡を絶つたが、十年ぐらゐる前までは、町を歩いてゐて、眉を落して齒をくろくくと染めた品の良い老女に出會ふことが稀で無かつた。村へ行けば今日でもちよいと見かけるが、でもそれさへおほかた義齒である。現代の都會の若い人たちは、カネを染めるなどといふことは一種の蠻風のやうにさへ考へるし、何かグロテスクなものと思ふらしい。しかし、眉を青々と綺麗に落して、齒を黒くつや

やかに染めた女の顔は、いかにも柔和で、美しく、古雅でさへある。私の義母は五十を過ぎてから高山から東京へ出てきて住むやうになつたが、やはり昔風に綺麗な齒を黒く、いつもつややかに染めてゐた。ところが東京に住むにはそれではおかしいと云ふので、カネを落して、白齒になつた。元來高山で小町娘と評判されて育つたほど美しい人であつたが、白い齒になると顔付が急にきつくなつて、一夜にしてその柔和な性質が失はれたやうにさへ見えた。江馬はそれを残念がつて、もとのやうにカネをつけるやうに懲めたものだつたと語つてゐる。じつさい眉を落しカネを染めた老女が、昔風に地味ではあるが、ちやんと整つた様子をして、黒縞子の帯の間から女持の煙草入をとり出して、小さい細身の銀の煙管で煙草を吸つてゐる様子などは、時には小意氣でもあるが、いかにも日本の女の古典的な美しさを見せてゐた。殊に東京からきてこんな古雅な美しさをほとんど忘れてゐた私の目には、お寺

の本堂なぞで、身綺麗な抜けるやうに色の白い老婦人が、静かに銀ぎせるから紫の煙をたゞよはせてゐたり、黒いつやく／＼した綺麗な齒をみせて優しく笑ひかけたりしてゐるのを見ると、何か江戸時代の芝居の一場面が浮上つて来るやうな錯覺をさへ感じたものであつた。

ついこの間までは、この古い高山の町にはそんな古雅な、一つのまとまつたスタイルをもつた老婦人たちが住んでゐた。あえて旦那衆の家庭にかぎらず、中流の婦人たちにもさういふ人を多く見かけた。

カネまたはオハグロをつける風習は、古くから日本全國にわたつて行はれたもので、何も飛驒に限られたことではない。しかし話題がこれに觸れたので、當地に於けるその習俗の一端を紹介して置かう。

オハグロをつける時期は國々によつてそれ／＼違つてゐるやうであるが、飛驒では一般に、どんなに若くても嫁入りの時、または婿取りに、齒を染めることであつた。昔は現代に比べるとずつと早婚で、娘十六七は嫁入り盛りとされてゐた。中には十三四歳の嫁様も珍らしくなかつた。よく老女たちの笑話に出ることであるが、嫁様に留守を頼んでお使ひに出て歸つてみたら、嫁様が寂しいつて泣いてござつたとか、嫁様に留守をたのんで出ると、歸りには駄ちん(お菓子)を買つて歸つたものだつた、とかいふやうなものだつたらしい。齒を黒く染めた十三ぐらゐの可愛らしいお嫁さんなぞ本當に思へないが、これは事實であつた。

また結婚がおくれて、ずつと家にゐた娘でも、高山の町では二十になれば、かならず齒を染めた。白川村の女たちは前に述べたやうに大方の女は嫁入りしなかつたが、こゝでは十九の春齒を染めた。それ以前に子供を産む女は珍らしくなかつたが、

十九までは白歯でゐた。

昔の女たちにとつては、カネをつけると云ふことは重大なことであつた。嫁入り仕度の何も無い裸の嫁様でも、カネ道具一式だけは持つて嫁入つたものであつた。

初めてカネをつける儀式も、村々では改つた事もなかつたが、高山の上流家庭では相當派手にやつてゐた。

嫁入りの五日ぐらゐる前に、カネ親の家でそのつけ初め式が行はれた。カネ親は娘の母親の生家の伯叔母が多く、それがなければ、本家または別家の誰かが申し出てその任に當つた。當日娘は母に伴はれて、カネ親の家へ招かれて行つて、カネ親に教へられ、手傳つてもらつて歯を染める。カネ道具一式は、カネ親が祝ひとして贈る。この初めてつけるカネは、「ナナトコロカネ」と云つて、親戚や知合の女たちのカネを貰ひ集めて使ふ。今は忘れられてゐるが、これには何か信仰が伴つてゐたら

しい。無事にカネをつけ終ると髪を島田に結びあげ、色の紋付に改める。この頃あらかじめ案内してあつた近親の婦人たちが、お祝ひのお相伴客として集つてくる。これらの人々はお祝ひとして、白粉、紅、半衿などを贈る。夕方から母娘を正客として酒宴が始められる。仲々禮儀正しく行はれてゐた。

その後だん／＼カネ親の習俗もすたり、カネつけ祝ひも、簡単に娘の家で嫁入り數日前に、近親數名を招いて、内祝ひをする程度になつてしまつた。尤もこんなに丁寧にお祝ひをしたのは上流の家庭だけで、一般では赤飯を蒸して、「カネ祝ひをしましたで」と配つたぐらゐであつた。親戚からは何かお祝ひをした。

カネをつけた黒い歯は、青く剃り落した眉を連想させるものであるが、古くは嫁入り前の、カネ祝ひの日に、眉を落してしまつた。二十前の眉を落した嫁様など想像してみると少しむざんな氣がするが、習俗ともなれば別に不思議がられもせず

行はれてゐた。それどころか二十過ぎても眉も落さぬ娘は不仕合せに見えたと違ひない。それでもだん／＼嫁入りの時に、眉だけ残して置き、初つ子が生れた後に落すやうになつた。八十過ぎた老女にきくと、眉を落すのはさすがに寂しい氣がしたと云つてゐる。

カネを黒く美しくつけて置くと云ふ事は、仲々手數のかゝつたものらしく、無精をするとすぐはげて、いはゆる「たにししろあの白和へ」みたいな汚ないものになつた。女たち自身も齒のはげてゐるのを非常に氣にしたらしく、「何處かへ誘はれたけど、齒がはげてををつたで、よう行かなんだ」とか、「誰かに久し振りで會つたが、齒がはげてををつて恥づかしかつた」とか、氣苦勞が絶えなかつたらしい。身綺麗にしてゐたものは、どうしても一日おきにこの厄介なカネつけをせねばならになかつたと云ふ。

今では旦那衆でも女子衆(女中)を三人も五人も置いてゐる家などは無くなつてしまつた。もしかしたらそんなに女子衆になり手がなくなつた、と云つた方が正しいかも知れないが。こゝ十五年二十年以前までは、女子の三人ぐらゐ、乳母の二人ぐらゐ、それに子守もと云つたやうに女子たちの大勢ゐた家も少くなかつた。それは町の旦那衆だけでなく、在方の地主たちにも珍しくなかつた。

その女子たちも一年二年の務めでなく、三年五年のは普通で、永いのは十二三年から嫁入まで務め、主家から嫁入りさせて貰つたと云ふことも決して稀れではなかつた。そして嫁入つてからも、お出入と稱して生涯主家と關係の絶えないものが多かつた。主家に吉忌の取込みごとのある時は勿論、盆暮の忙しい時から大掃除、秋の漬物の手傳など沙汰を受けて働きに行く。もちろんこれは日給を貰へるのではあるが、半ば御用でくるのであつた。女子たちの方も某家の出入りであると云ふ事

を誇りに思ふやうな風であつた。今はもうそんな主従関係も稀れにしかなくなつてゐるが。

明治初年頃、おうめ縞一反が十六七錢で買へた當時には、女子の給金も一年一圓五十錢ぐらゐるものであつた。明治三十年頃には一年七八圓ぐらゐる、三十を越した働き盛りの年増の女子で一年八九圓ぐらゐるが最上であつた。そしてこの給金は年二期二月と八月に支拂はれる風であつた。

給金以外のをなごの収入は、祝儀、不祝儀その他の進物を持つて使ひにゆくと、貰ひ先では、使ひ人への駄賃として小袋に小錢を入れて返すならひである。現在では普通十錢か二十錢、時によつては五十錢位出すが、以前は一錢、稀に二錢くれることがあつた。この駄賃はその都度使ひに渡さず主家で預つて置き、これも年二回の給金を渡す時、使ひ歩きに出ない女中へも公平に分けて與へた。

この外に二月八月に木綿縞一反づつと、暮に足袋が一足もらへた。きまつたものはこれだけであるが、この外においへの衆の着古しを下げて貰つたりした。

こんな僅かな給金でよく永年務めあげたものと、今の私たちは不思議に思ふが、昔はこの務め口がさう簡單にはなかつたやうである。殊に堅い旦那衆の家に住込むには、遠くの村々から出て來たものは、町中に親戚か知合に「ヤド」がなければならなかつた。「ヤド」は身元引請人であるが、親代りになつて一切の責任を引受けねばならなかつた。何か事故のおこつた時の始末をはじめ、長病氣の時は引取つて養生もさせねばならなかつた。

雇入れは大體年期のきめがなかつた。世話は主家の依頼を受けた出入りのものや出入商人がすることが多かつた。御目見え當日は主家では、特にその女中だけに御膳におひらをつけてもてなすならはしであつた。

高山でをなごをしてゐるものは、多く莊白川、上寶、丹生川各村の奥から出て來る者が多かつた。昔から莊白川方面から來るものに「雪けやし」と呼ばれてゐるものがあつた。食料の少ない莊白川村では明治も中期以後は、冬口をあづけると云つて冬の間だけ町で働き、食べさせて貰つて、いくらかでも小使が稼げればと云ふのであつた。町ではこれを雪けやしと云つてゐたのである。旦那衆のやうに永年住み付く者を望んでゐた家では、これを嫌つたが、寒い冬場だけ勝手仕事を手傳はせたい町家には、これもまた重寶な存在であつた。冬場だけと云つて働に町に出る娘は今も少しはある。

舊家でのをなご奉公は、朝早くから夜おそくまで、仕事も激しいし、それに行儀もやかましく、着物でも勝手な物はきられず相當辛いものであつた。髪を結ぶにもしまひ風呂に入るにも、一々おいへの衆に、「おたの申します」と許しを得なければ

ば何一つ自分の事は出來なかつた。

ひま／＼には洗ひ張りから縫物、また冬分は足袋の造り方まで教へられて作らねばならなかつた。堅い家では何家に永年ゐたをなごは、針を持つすべも知らない、などと笑ひものにならぬやう、お針もならはせると云つた風であつた。もちろんそれは身のためではあつたが、一日働き續けた身には相當にこたへる仕事であつた。

身分制度のきびしい田舎であつたから、をなご衆たちのきるものも、前に述べたやうに勝手な着物をきられず、をなご衆風といつた一つの型があつた。親ゆづりのものであつても何にしても絲の入いつたもの(すなはち絹物)は一切許されなかつた。それに浴衣といふものが流行り出しても、それも着てはならなかつた。普通木綿縞の筒袖、冬はその上に木綿縞のどをまり(大人の袖無のこと)、または單衣ばんでんと云ふものをきた。お使ひに外へ出る時には、黒衿のかゝつた半天を着た。羽織と

いふものは生涯に數へる程しか着ず、羽織をもつてゐないものも珍らしくなかつた。先年六十近くの老女が、入隊した息子に面會に行くために、生れて初めて羽織を作つて貰つてゐると話してゐるのを聞いたことがあつた。羽織なぞと云ふものは、自分たちのやうな身分の者の着るものではない、と考へて生涯を送つて來たのだ。だが今度は出征する息子に會ひに旅に行くのだし、時世が變つたから一枚作つて置けば、と考へたものだつた。

近年は大分變つてきてゐるが、羽織に對するこのやうな考へ方は、あえてをなご衆のみではなかつた。男の使用人でも、番頭と呼ばれるほどの年輩の人々でも、普段羽織を着通してゐるものなぞはなかつた。まして小僧や男衆たちは、二十歳頃までは必ず胴まりに藁緒の草履、二十過ぎてやつと半天と紙緒の草履をはく事が許されたものであつた。足袋も昔は紺足袋は使えず、淺黄の足袋をはかねばならなかつ

た。履物も、男女共表付や塗り下駄は使用出來ず、雪の深い國であるが高足駄に妻皮を付けてはく事も許されなかつたと云ふやうにきびしいものであつた。

休日は男女とも殆んど同様であつた。まづ正月の三ケ日と七日過ぎたところで三四日與へられる。それから九月のうら盆に二三日、これだけがきまつた休みであつた。正月の三ケ日は休みと云つても主家にをり、他は歸宅したり、家の遠いものはヤドへ下つて休養した。休みの日歸宅する時は、主家から砂糖、昆布、數の子などが土産として主家から贈られた。僅かばかりの品でも、これらの物を土産に持つて年に一二度家へ歸るのは、本當に嬉しかつたと老女たちは話してゐる。

この外をなご衆の主家に於ける居間とか、食事とか色々あるが、それらは委しく述べなくても、彼女たちの生活が、現代のそれに比らべると比較にならぬ程きびしいものであつたと云ふ事が分つて頂けると思ふ。しかし、彼女たちの大部分は、こ

れがをなごと云ふものゝ生活であると考へてゐて、その生活に忍従してゐた。そして主家を尊敬し、前にも述べたやうに生涯その出入りである事を喜び、誇つてゐた。主家の方でも物質的に何かと便宜をはかり、をなご衆の方でも、自分の差支へを置いて主家のためにつくす、と云ふ風である。今日ではもうさうした關係は稀にしかみることが出来なくなつてしまつた。

女ばかりの行事

娘時代を扱つた行事の中で、飛驒に於ける一種の娘宿とも云ふべき民俗について述べて置いた。村で一軒の宿をきめて、そこへ娘たちが苧桶(ヲボケ)をもつて集り冬の夜長に圍爐裏をかこんで楽しく語らひながら苧績(をう)みの夜業(よたべ)をするのである。ここへ若い男たちが遊びにくることは、拒否しなかつたが、これなぞもいはゞ、女ばかりでやる行事のうちに算へられる。

正月二十日を普通に骨正月とも云ひ、乞食正月とも云つてゐる。なぜこんなおかしな呼び方をされてゐるか云ふと、お正月も二十日になると、色々と用意した御

馳走も大方なくなり、年越魚の鱈も骨ばかりになつてしまつた。その骨でも煮て祝ふより仕方ない。七日前の正月がお大じん正月なら、二十日はまあ乞食のやうな正月だ、といふ意味であるらしい。同時にこの日を「女の正月」だとも云つてゐる。どうも割の合はない話である。これは特に町よりも村々でさう云はれる。つまり近所の女ばかりが集まつて、おやじや男衆に気がねなく、御馳走はなくても、御手料理でたのしく遊んで暮らして良いことになつてゐた。

よその國でもさうのやうであるが、飛驒でもお産の室には決して男を立入らせない。それどころか、初産の時主人が家にゐると、その後のお産の際主人が他出してゐると子供が生れない、と云つて産氣がつくと大急ぎで親類へ逃げだして行つてしまふぐらゐである。産婆と手傳の女房だけでお産をすませる。つまり出産は女だけ

でめでたくすませるのが昔ながらの習俗なので、難産のために醫者が立合などは例外でもあり、もちろん近年になつて始まつたことである。

村へ行くと「ポボ見」といふ習俗がある。ポボといふ方言にはいろいろな使ひ方があつて、普通ドングリと呼ばれる櫛の實を櫛ポボと云つたり、小さい人形をポボサと呼んだりするが、こゝでは赤ちやんの意味である。初めての赤ちやんが生れると忌あけの後で、在所のカボサたちを一人残らずよんで、お酒をふるまつて本格的な酒盛をして騒いで遊ぶ。嫁の親からすればこのポボ見は初孫祝ひであつて、招待されたカカサたちは着物の上に浅黄夏着あさぎなつぎを羽をつて、腰紐を前に結んで出かけて行く。この浅黄夏着といふのは、前にもあつた如く、麻布の浅黄色に染めた単衣で昔は農婦にとつての一種の晴衣に當つてゐた。下にどんな立派な着物を着てゐてもこれを羽をつてゆくことが、この場合は一番禮儀にかなつた正しい服装であつた。

このポボ見では、女たちはするぶんお酒を呑んで唄つたり踊つたりの大騒ぎをやつたものだつたと云ふ。その揚句に、三味線がなくてはどうも面白くないと云ふので、しまひには三味線のひける男衆まで呼んできて遊んだ。といふのは明治時代までは、村で三味線をひくのは男の役目で、女は決して三味線その他の樂器を扱はないのが民俗だつたから。村の女で三味線をひるたりするものは堅氣な女と思はれてゐなかつた。白川村では現在でも酒席では男が三味線をひくし、高山でも盆踊には男がこれをひき、女の三味線は品がなくて踊りにくいと云はれてゐる。

女ばかりでポボ見の酒宴を張れたのも、今日では昔がたりとなつてしまつた。

女ばかりの民俗に、「女中みたて」といふのがあつた。これは飛騨でも特に高山の町で葬式に際して行はれるもので、村々では高山ほどはつきりした形をとつてゐない

今日までの調査では、日本の他の國々では同じ習俗はちよつと見られないやうである。それは、

葬式の時、通夜の晩など、飾つてある棺の兩側、または片側に、盛装した女ばかりがひと塊り並んで坐つてゐる。大體死者の血縁のもの、親類のもので、近い關係のものほど棺に近く坐つてゐる。そして男たちはといふと、大抵次の間に坐つてゐるのである。

この女たちを指して、「女中みたて」と呼んでゐる。そしに、「女中まへり」「女中づきあひ」等の言葉があつて、女中まへりは女中みたてに參ることであり、女中づきあひは、女中みたてに參列するほどの親しい交際であることを意味してゐる。

女中みたては、事變以後婦人會などの提唱で、外面的に大變に變つてきた。それ以前は女中みたてには、特殊な服装があつた。髪のことから云ふと、女たちは例外

なく「葬式たぶさ」と云はれる飾のない喪の髪に結つた。この葬式たぶさといふのは東京あたりでは小意氣なと云はれる、つぶし島田とほゞ同形であり、未婚者は高島田を結つてゐた。

衣類は大體に於て紋付を着る。それも黒無垢でなく、高い裾模様のある派手なもので、葬ひの席なので、ちよつと見慣れないものには異様に見える。若い高島田の娘を一人引離してみると、お祝ひの席と間違ふぐらゐである。以前二三の人とも話し合つたことであるが、これは葬禮の服装の用意が無いために、婚禮の折の派手な衣裳をきて出る、それでいよゝゝ葬式が始まると、その上に白を羽織るのではあるまいか、と云ふ意見もあつた。白といふのは、麻で作つた打かけのやうな裾長のもので、女たちは一せいにそれを羽織るならはしである。この白は中流以上の家庭ならどこにも二三枚から四五枚は用意されてゐる。

また、丹生川村の奥の方では、下から白を着て、その上に更に白をはをる、元來さうしたもので無かつたらうかと語つてゐた人もあつた。

しかし私は葬式の禮服の用意がないから、間に合せて婚禮の時の衣裳を着るのではないと思つてゐる。そんな消極的な意味からでなく、むしろ婚禮の時と同じ禮装で死者を見送るといふことに、本來の意味があるのではないかと考へてゐる。事實全國で祝儀と不祝儀との服装の調査には、この兩者は、ほんの僅の差異をつけるだけで、共通してゐる場合の非常に多い事を示してゐる。現在に於ても白無垢が、嚴格な意味の第一禮装であることは云ふまでもない。それにいかに飛驒が、「下々の下國」であつたにせよ、幾代も續いた旦那衆も何軒もあることだから、特に葬式の禮服があつたのなら、その邊に多少の形式だけでも残つてゐて良ささうに思へる。

飛驒の娘の婚禮の仕度を見ると、驚く程紋服類の衣裳が多い。夏冬の黒に色物、

もつと丁寧な家では盛夏用の黒に色物と云ふのが普通である。こんなに数多い紋服は勿論婚禮の當夜着る譯ではない。これらの衣裳はその後の生活に於て必要な葬儀用に用意されると云つた方が當つてゐる。それがどれも裾模様付の美麗なもので、黒無垢に黒帯と云ふのはこゝ四五五年の事である。

近親に不幸があると、その夜は大病トギと云つて、血縁のものだけが通夜をする。この時は禮服ではないが、死者のまはりやはり女だけが圍んでゐる。次の日納棺して、本トギである。その日女たちは色の紋付に葬式たぶさである。前にも云つたやうに、女たちばかりが棺を護るやうに兩側にすらりと靜肅に並んでゐる。大きい家では二十人も三十人も坐つてゐるのが珍らしくない。

讀經の切れ間をみて、大體八時半か九時頃になつて、夜食が出る。別室に膳部が並べられて、まづ棺の側の女たちが膳につく。この場合、膳部の持ち運びから配列

給仕、その他の雑用の一切を男たちがする。つまり羽織袴で、お銚子を運んだり、御飯を運んだりするのである。女は一切關與しない。たとへ雇女が幾たりゐたにしても席へは決して顔出しをしない。女たちは食事が済むと、そのまゝさつさと引上げてまた棺の側へ行つてしまふ。この場合つき合だけできてゐる者は歸り、極く近親のものだけが朝までトギをする。男たちの夜食はその後で、男たちが代り合つて給仕しながら食べる。本葬當日は黒紋付に、葬式たぶさ、丸帯と云ふ服装である。尤もこの服装も相手の身分に依つて相違がある。自家より目下の家の葬式に參列する時は、トギの夜は縞物に色の羽織、本葬當時は色物、また旦那持ちの者は親の葬式にでも黒紋付は着られない、と云つた風である。

本葬後、三日の茶と云ふ食事を會葬者一同に出す。これは忌おとしの意味をふくんでゐるらしい。この場合もお取持ちは男の役目である。

高山の人たちは、小さい時から女中みたてに慣れきつてゐるので、これが當り前だと思ひ、日本全國でも、かういふものだらゝるに思つてゐて、一向に怪しまない。しかし私は長年東京に暮らしてゐた後で、高山へきて始めてこれに接した時には、まつたく奇妙な、不思議な感じに打たれた。習俗があまり珍らしいことも心を打つたが、同時に、飛驒は封建的遺風が濃厚な土地柄であるだけに、男尊女卑の風がかなり際立つてゐて、私など日常些細なことでするぶん不愉快な、腹立しい思ひをすることが少くなかつた。ところが、農村の田植の日と同様に、この葬式の時に限つて、女たちが日常の低められた位置から、高い位置と稱すべきか、とにかく男以上の特殊な位置をとられる。これは一體どういふ譯なのであらうか。

故佐喜眞興英といふ人の「女人政治考」といふ本の中に、次のやうな事がある。

「昔琉球では人が死ぬと、葬式まで、親族の女たちはずつと聲を立て、泣いた。

葬式の準備の出来るまで、女性たちは死體の周圍に坐つて泣いた。弔客も女性はみな泣く。葬列に於ては、親族の女性たちは白い芭蕉布を頭から被り、泣き乍ら之に加はつた。同様の習俗は伊豆の大島、能登、日向等にもある。」

パチエラー博士によれば、「アイヌの女性は葬式の時泣く風がある。」

古事記にも同じ場合女の泣くことが記されてゐる。

飛驒の女中みたての民俗も、他國のかうした習俗と關係があるらしく思はれる。いづれにしても、かなり古い民俗の名残であることには間違ひはあるまい。

女ばかりの行事と云つては誤解があるかも知れぬが、女中みたてと同様、その日に限つて女たちが特殊な高い地位をとるものに田植に於ける早乙女さうとめがある。やはりこれについては多少なりと書いて置かねば、大切なことを漏らしたことになる。

「師走坊主に五月早乙女。」

莊川村白川村の方へ行くと、古くからかういふ言葉がある。師走といへば、真宗の村々では報恩講の季節で、寺の住持の一番に忙がしい、そして一番に持てる時である。今ではまさかそんな事はないが、昔はお寺サマを迎へるためにわざ／＼道普請をやつたり、路ばたの便所にドシバと云つて、シヨーゴイの木（常盤木で、當地では榊として神事に用ふ）を兩側に立て、清めにしたりとさへ云ふ。とにかく師走坊主は、そんなに大切にもされたし、威張りもしてゐたらしい。五月早乙女がその坊主に比較されたのだから、むかしはなか／＼幅のきいたものであつたことが想像されやう。

早乙女は——方言でさうとめと呼んでゐる——は五月乙女の轉化だと「言海」では云つてあるが、云ふまでもなく田を植ゑる女たちである。この言葉は大たい若いを

とめを意味してゐるが、實際は必ずしもさうとは限らない。昔は田植にはなるだけ若い娘たちを大勢揃つて田植ゑをするやうにしたものであつたらしい。若いきれいな早乙女が多勢揃つて、あちこちと田植ゑに雇はれて歩いたものだつたと云ふ。今日では殺風景に男ばかりで田植ゑをすますところもあり、それ程でなくても半分位は男が混つてゐて、鄙びた美しい早乙女すがたも、従つてその民俗も年々減びて行きつゝあるが、しかも傳統が全く絶えてしまつたといふ譯では無い。事變直前でも、田植の日には、早乙女の給料は男の人たちと同じく一圓前後であつた。普通には女の給料と云へばずつと少く、男の半分ぐらゐるものも珍しく無いのに、今日でも早乙女に限つて、男と同格に待遇される。どうやら、むかし早乙女が大事がられた時分には、男よりもつと良い給料と待遇を受けたものゝやうである。

高山近在では、少くも明治二十年頃までは、早乙女をやる家の娘や嫁は勿論、を

なごにも主人から麻を與へて、淺黄夏着すなはち田植ゑの晴衣を作らせたことは、既に前に説いたとほりである。白川村地方では、明治初年頃は、早乙女の給料として、米二升が普通であつたといふが、外に氣附もあつたらしい。それに田植時には今でも五回乃至六回の食事をするが、晝飯には三合炊の飯をテシ盛りにしたお椀を、男には一つ、早乙女には二つづつ供するのが白川村の習俗だつたといふ。早乙女はそれを朴葉につゝんで家へ持つてかへるので、つまり給料外の附與となるわけで、男よりも二倍のあてがひを與へられたことになる。だから、丹生川村地方に、こんな民謡が残つてゐる。

五月こわいよ

米の飯くれて

二百出す時ア

目がむける

田植は、云ふまでもなく、特別に重要な生産的労働である。そしてこの労働にはおのづとみのり多い秋が期待され、祈願される。従つて田植日は多産と豊穰に對する一種呪術的な祭り日の性質を持つてゐた。少くも明治時代まではさうであつた。そして早乙女はこの生産的な大切な労働日の女主人ヒロインなのである。ふだん社會的地位の低い、男に従屬させられてゐる女性が、どうして田植日に限つてこんなに優遇さるのであらうか。

皆さんはまづ、原始的な古代社會では、狩獵が男子の專業であつたのと並んで、農業はもつばら女子の仕事であつたことを承知して置いていたゞかねばならない。女子が専ら農業をやるといふことは、今日でもなほ未開民俗の間では一般に行はれてゐることであつて、宇野圓空博士によると、ジャワでは稻は植付から刈入れまで

女の手でなされるのが普通で、その理由としては「男の手は熱い」、すなはち熱氣があり、汚れてゐるからいけないとされてゐると云ふ。パラオでは、常食の里芋の栽培はやはり女によつてなされ、しかも貴婦人までがこの生産労働に参加する。アメリカのニジェリアでも農耕は婦人の仕事である。アメリカのオリノコ地方のインヂアンは、麥作は女の仕事で、女が作るのでなければ麥は生長もせず、實りもしないと信じられてゐる。ヒダツア族(アメリカ・インヂアンの一族)では、女には何によらず作物の生長を早める神祕的な能力があると信じられてゐる。フィリッピンのイロカン族では、バナナの栽培を男子がやるが、しかも女のやうに子供をおぶつてやる習俗がある。以前にはもちろん、女の仕事だつたに違ひない。

考古學者たちの研究によると、日本の上代に於いても、やはり女が農耕を主としてやつてをつたものと考へられてゐる。もとより農業と云つても、原始的な、極め

て幼稚な時代のことであらうが、それといふのは、男子たちは狩獵を専らとしてゐたからと云ふばかりでなく、女といふものを不思議な生産力に恵まれた、豊穰な、多産なものと信じられてゐたからである。だから、うけもちのかみ保食神にせよ、稻田姫にせよ、農業と生産に關係のある神々は女性であらせられることが多い。

その後、金屬があらはれ、鍬、犁、耙のやうな専門的な農具が出て來、さらに家畜が加はり、農業と云ふものが激しい勢力を要する頃になると、農耕に於ける主要な役割は女性からだん／＼男性の手に移つて行つた。その後も女性は依然として農業上の勤勉な働き手であることに變りはなかつたが、しかも男の助手にすぎなくなつた。しかしながら田植日のやうに特別多産と豊穰の祈られるやうな大切な時になると、おのづと古い時代の習俗が回想されるかのやうに特別に優遇されて早乙女が登場する。私にはやはり早乙女の位置についてはそんな風に考へられてならない。



ちた娘ふかむに畑

小町むすめ

飛驒は普通に美人系だと云はれてゐる。この美人系といふ言葉が、正しくはどういふ意味を持つてゐるのか、私はよく知らないが、少くも次の二つの點は含んでゐるやうに思はれる。第一に、一般的に云つて顔だちが揃つてゐて、あまり見にくいものが少いこと、それからいはゆる美人を多く産すること。第一については、多くの旅行者が高山の町や村々を歩いてきて、一様に、「飛驒の女たちは顔だちが良い」と云ふのにみても立證されるし、私自身もその證人となつても良い。いつも空氣が澄んでゐて、殊に秋から冬へかけては晴れ渡つた日に、ちり一つ浮んでゐない美し

さ。それにまた水がきれい、河なぞ底の砂の一つ／＼まで透明にすいてみえ、小魚の影が映つてゐる。こんな空氣と水のせい、飛驒の女は一般に色が白く、キメがこまかく、滑らかである。日本の女は餘程色白のものでも、幾分琥珀色で黄味を及びてゐるのが普通であるが、飛驒の若い娘には本當に白つ子のやうな白い子がゐる。こんな娘は夏の暑い日など汗ばんでゐると顔も、半袖のむきだしの腕も、靴下の無い足もさくら色に見える。百姓女も決して例外ではない。彼女たちは毎日田畑で烈しい労働を營んでゐるので、手も足も荒れ、顔は男のやうに日焼けしてゐるものが多い。それでも一旦その肌をみると、その白さと滑かさにびつくりする。殊に健康な百姓娘たちに到つては、眞冬の寒氣の中に頬は紅蕪のやうに赤く、四肢は彈力に富んでピチ／＼してゐる。娘たちの労働してゐる姿をみて、私は何度その逞ましい。健康な美しさを讚嘆したか知れはしない。

色の白いは

山中のむすめ

栃のコザワシ

食ふたせいで

栃のコザワシについては、「カカサの勤め」の中でくはしく説いて置いたが、果してこのコザワシのせいであるかどうかは別問題として、奥の山村の娘たちは色白で昔から際立つてゐたことは、こんな民謡によつても察せられるといふものである。ところで、こゝに山中の娘と云つてゐるのは、必ずしも百姓娘といふ意味では無い。山中と呼ぶのは、文學的に奥山の中といふ意味だけでなく、北飛驒の河合村の奥深い山間部を指して云ふのである。もちろん山村ではあるが、同時に山中にはむかしから木地屋、または木地師が多く住んでゐた。木立の多い山の中に小屋を立て

て住んでゐて、まはりの木材を切り倒し、それで木地椀、木地盆、その他の木地類を作つて生活してゐたのである。五六年同じところに住んでゐて、まはりの用材を伐つてしまふと、別な山に小屋を立て、引越してゆく。だから「木地屋の宿がへ」といふ言葉があつたくらゐるで、彼等の生活はまったく山から山への移動であり、山人の生活であると云へる。かうした木地師の生活をしらべることは、民俗學の上から大變興味の深いことであり、すでに幾たりかはこれについて相當にくはしく研究してゐられるが、あまりわき道へ入ることになるので、私はこれ以上深くこの木地屋に立入ることは止めて置きたい。

さて、「斐太後風土記」と云ふ本の中に、この木地屋の風俗についてかう書いてある。「木地師は男も女も深山の小屋の中にばかり住んでゐるから、しぜん日光にも當らず、人里遠く離れてゐるおかげで、疱瘡などに冒されるといふことも無い。それ

でおのづと、男も女も、顔色が白くて、腰が大きい。腰の大きいのは、もちろん木地作業のせいである。だから、色が白くて腰の太い女を、當地では（ありや木地屋の娘ぢや）と呼ぶくらゐである。――」

木地屋の娘に美人が多かつたことは、古老たちのよく語るところである。今日でも丹生川村の折敷地せしきぢの奥に、木地屋と呼ばれる小字がある。家は一軒しかない。むかしは木地屋をやつてゐたもので、その女房がとても色白な顔立ちの美しい女だつたと、明治時代にそこらを歩きまはつてゐた老人たちが讚嘆の調子で話してくれらる。ひだの深山でみる色の白い若い女が、どんなに美しい魅力のあるものに見えたことであらう！ よく民謡に出てくる「奥山住る」と云ふ表現も、こんな木地屋の娘にあこがれてのことであらうか。

町には村々にも増して美人が多く、いつの時代にも「高山小町」として評判の高い娘が二人や三人はあつた。どういふものか、高山では藝者と云へば、おほかた名古屋女で、名古屋辯を使はないものは藝者でないやうに思はれてゐて、名古屋生れでないものでもそれをまねてあの甘つたるいおかしな言葉のせいもあるかも知れぬが、土地で藝者を美しいと思つてみたことがない。しかし高山の女衆たちには時々こんなに美しいひとが……と思つてみるやうなのに時々出會ふことがある。

私の義母はもう二十何年か前に無くなつたが、やはり娘時代に高山小町と評判されたほどで、年をとつてからも實に綺麗な人であつた。晩年東京で暮されたが、誰も田舎生れ、それも飛驒の高山生れだと言つても信じる者がなく、ちやき／＼の江戸子だと思はれてゐた。義母は四人姉妹で、いづれも評判の美人ぞろひで、どうしたら、こんな美しい子が生れるのか教へてくれ」と、まじめになつて義祖母のも

とへ聞きにきた人があると語り草に残つてゐる程である。義母の末の妹が、義母にもまさる美人で、色の抜けるやうに白い、姿の良い、富士額に、三ヶ月形の細い眉をした瓜ざね顔で、何のことは無い、歌麿の浮世繪から抜け出てきたやうな、古典的な美しさだつた。旅人なぞ町を歩いてゐて、フトこの人に出會ふと、思はず立止つていつまでも見送つてゐたものだと思つてゐる。面白いことに、軍神廣瀬中佐が少年時代よくこの人の家へ遊びに来て、随分やんちゃを働いたものだとも聞いてゐる。この人ももう十何年か前に亡くなつた。

やゝ古いところに、合羽屋かつはやおらくがある。合羽屋おらくのことは、江馬が「山の民」第二部の中にくはしく生々と描き出してゐるし、數年前東京明治座で別の作者のものが上演されたこともあるので、今ではかなり有名な女になつてゐる。時は明治元年、おらくはまだ十六の小娘であつたが、當時の高山小町として、まったく並

ぶものゝない美人と評判されてゐた。時の革新的な知事梅村速水は、維新の折から人倫を正さうといふ熱烈な趣意によつて、男女の風儀を殊の外やかましく取締るところし、それに背くものは容赦なく嚴罰に處することにした。折からおろくは密通のかどで檢舉され、見せしめとして町で三日間晒しものにされた。その情景を「山の民」はかう描いてゐる。

「擬寶珠の青さびた代官橋の詰には、廣場の彼方に見える御役所のいかめしい門と呼應するやうに、幕府時代からの制札場があつて、切支丹宗門禁制、徒黨強訴の禁制、太政官の諸布告、男女密通取締の布告、その他數々の眞新しい高札が、ところ狭いくらゐるに立並んでゐた。そこから、宮川の川原へ通する屈曲した細道があつてその曲り目のところが一段高い土壇のやうな空地になつてゐる。そこにゴザ一枚敷いて、その上におろくは晒された。すでに手鎖をつけられてゐる上を、太い縄で幾

重にも縛られ、繩の端を太い杙に結はへつけてあつた。彼女は黄縞の着物に、やはり黄いろい色のたんぜんを着て、豊かな黒い髪を島田に結つてゐたが、折れたやうにがくつりと首を伏せてゐたので、人々はその白い滑らかな頬の一部と、紫の半衿と黒い着物の衿の間から抜け出した細い、うい／＼しい眞つ白な頸しか見ることが出来なかつた。

彼女の前には、晒しものにした理由として判事局の宣告を書きつけた木札が立ててあつた。そして二人の番人が、彼女の左右に立ち、太い棒を彼女の前に兩方から交叉させて、ともすればどつと前へ押出されてくる黒山のやうな見物人に向つて、絶えず荒々しい聲でどなつてゐた……」

一度こんな目に會つた女が、いかに絶世の美人だつたとしても、幸福な將來を約束される筈がない。後年彼女が妾ぐらしを渡世とするやうになつたが、晩年はまつ

たく零落してしまつて、この上もない窮乏の中で、貧乏長屋の一つで相果てた。實は、いつまでも家の戸が開かないので、近所の人々が怪しんで戸をこじあけてみたらおらくはいつか死んでゐたのである。しかし、よほどすばらしい美人だつたことは疑ひない。今でも彼女の晩年を知つてゐる人々が残つてゐて、その美しさを口を極めて讚美してゐる。

かういふ特別な美人のことは別としても——それはまた各地にあることであらうし——私はよく町を歩いてゐて、よく見かける老婦人たちに、いかにも姿の良い、上品な顔立ちをみて驚くことがある。それがこの飛驒と云ふ片田舎であるだけに一層印象深い。しかし、考へてみれば、高山のやうに雅びた町に、水の清らかさと、空氣の澄明さを思出されるやうな美しさのあることも不思議はない。それは靜的な

古典的な美で、いかにもこの町に似つかはしい。

しかし時代は動く。かゝる古典的な美しい面かげもだん／＼影を沒してゆく。そのかはり若い娘たちの中に、新時代の、潑灑とした動的な美が生れつゝあることは疑ひない。

農村婦人を擁護せよ

さて、私どもは飛驒の女たち、特に農山村の女たちの生活文化の状態を、かなりこまごまと眺めてきた。民俗学の學徒として、私は主に民俗的に觀察してきたし、従つて今日の状態よりも、とかく古い時代に溯つて説いてきたことは事實である。とは云へ、それといふのも結局は今日の状態を一層正しく、委しく理解せんがためである。近頃はよほど状態も改善され、文化水準もやゝ高められたとは云ふものゝ例へばツブラ時代に於ける乳幼児の衛生状態と保護の有様は昔からみてどれほど進んできたであらうか。烈しい勤勞に伴ふ嫁とカカサの過勞と、食糧の不備による榮

養障害(それは無智によるものも多い)はどれほど克服されたであらうか。乳幼児の死亡率はどの程度に減じたらうか。村々の平均寿命はいくらかでも延長されたであらうか。それを考へると、残念ながら否定的な答しか見當らない始末なのである。今もこの方面だけはくりかへされて居る様に思へる。

少しばかり實例について見やう。私たちはすでに、山村の衣についても、食についても委しく見てきたが、住居については殆ど觸れるところが無かつたので、今度はその方面に觀察の眼を向けてみやう。殊に冬期の防寒設備の角度から。

ひだは冬が長く、雪が深い。嚴寒には零下十度から二十度ぐらゐを上下し、ひどい時は二十四五度に達することさへある。しかし土地では一般にストーブといふものを用ひない。暖をとるためには圍爐裏の焚火と、炬燵があるだけである。これだけで、あのガランとした大きな家の中で、寒い長い冬をすごさねばならぬのだ。

ところが、よく調べてみると、この炬燵が一般農家で用ひられるやうになつたのは、明治中期以後、やつと三四十年來のことなのである。町には古く江戸時代から炬燵があつたが、村々には無かつたのである。炬燵がないとすると、暖房機關としては圍爐裏の焚火しか無かつたわけである。四尺四方、または五尺四方の爐に大きな火を燃やし、そのまはりに荒蓆を敷き、その上に坐つて嚴寒の夜ながをすごしたのある。今でも白川村の人たちは、寝る前になると肌ぬぎになり、焚火で腹と背を存分に暖めて、それから大急ぎで寢床へ飛びこむのだと云つてゐる。それでこゝいらの人々には、アバミ(火斑)が手や足でなく背や腹に残つてゐるといふ。

では、寢具はどうかと云ふと、今日では良いなり悪いなりに綿の入つた蒲團を持たぬやうな農家は殆ど無いと云つてよいが、三四十年前までは、蒲團なぞ持つてゐない家が大部分だつた。明治中期までは高山郊外の七日町村の百姓屋でさへ、一

二の例外を除いては、全部が床の無い、いはゆる土座住居だったのである。土座の家に住んでゐるものは、殆んど蒲團を使はなかつた。藁か、稗ガラか、または蕎麥ガラが土間一面に敷きつめてあつて、その中へもぐりこんで寝るのである。しかも昔はこの中で素裸で寝るものが多かつたときいてゐる。

床のある家では事情がまた違ふ。ここでは、冷たい板敷の上に、荒蓆を敷き、その上に藁や、稗ガラなどを五六寸の厚みに置き、麻布を二三枚刺合せたものを敷いて横になる。かういふ寝方は近年までつゞいた。スベ蒲團と呼ばれる藁蒲團は、その後に出現したもののやうである。これは現在でも使用されてゐる。上枝村生れの七十になる老爺が私にこんな話をした。この老人は子供の時分にどんな蒲團にも寝たことが無い。板の間の上に荒蓆を一枚、その上にスゲ蓆を一枚敷きかさね、着のみ着のまゝで寝たといふ。寒中のごく寒い時分には、雑巾のやうに刺したものを上

から一枚かぶつて寝たにすぎない。長年さうしてきたが、元來丈夫で、病氣なぞした覚えが無いと云つてゐる。

以上はいづれも明治中期までのことであつて、今日ではまるで様子が變つてしまつたと云へる。土座の家なんて、今日ではどんな奥村へ行つても殆んど見られない炬燵はどんな貧しい農家にだつてあるし、綿の入つた蒲團だつて同様である。まさしく生活文化の上で大きな進歩が行はれたわけである。しかしながら、都會が明治以來文化的に進歩した高さからみると、ほんの僅かなものであることは誰にでも分る。明治初年、都會生活の最初の出發點の高さにまで、今日の農村が達してゐるかどうかも疑はしいくらいである。

しかも村々の平均壽命がわづかに三十代だつたり、乳幼児の死亡率が驚くべき高さにあることなど考へると、單に厚生文化の面からみても、私はじつとしてゐられ

ないものを感じさせられる。農村文化運動、わけでも保健衛生の問題が、今日もつとも緊急な、重要な問題として論議の的となつてゐるのは、全くもつともな事である。識者の注意の向けられる日があまりに遅かつたと云ひたいけれど、それでも在來のやうに無關心に看過されたことを思へば、まことに結構な有難い事である。

農村は日本民族の源泉だと云はれる。もつともな言葉であつて、最近やかましく宣傳される國民生活の培養、また増強といふことも、要するに一番に農村の生活力の強化といふことが基本では無いかと思ふ。農村の厚生運動はもとよりそのためのものであるし、農村の文化運動も當然この方向にそつて進めて行かすべきであらう。ところで、農村の厚生文化運動の中で、特に私が強調しなければならぬと考へることは、何よりも、農村婦人の擁護といふことである。農村婦人の擁護運動を充分

に展開することをしないで置いて、厚生問題を聲高く叫んだところで、または乳幼児の死亡率を問題にしたところで、それは片手落ちだと思ふ。それほど國民の生活力の増強といふ建前からみても、農村婦人の擁護といふことは、まつたく焦眉の、重大な問題なのである。農村が民族の源泉であるならば、女たちこそその母胎であるのだから。

農山村の女たちの生活が、どんなに烈しい生産と勤勞の中に終始するものであるかは既にくはしく見てきたとおりである。しかもその壽命率が到つて短いといふことも、幼児の多くが育たないことも、繰返へし説いたとおりである。農民一般の中でも、殊に女たちが過勞と栄養障害のために弱體化されて、恵まれない生活を送つてゐることを知つた以上、どうしてその擁護に関心をもたずにもられやうか。

年よりの女たちは、昔にくらべると、いま時の女たちは仕事がラクだと云ふ、氣

がねや苦勞が少いと云ふ。それは本當に違ひないと私も思ふし、それはそれで確かに結構なことだと云はねばならぬ。假令二三步の前進でも確かに良いことであるから。しかし、二三步は要するに二三步にすぎぬし、私たちはまだ百歩も千歩も進まなければならないのである。

そこで、私は、つぎの點について特別に皆さんの注意と反省を促したい。なる程農村の女たちの生活は、むかしからみると或程度改善されたと云へるかも知れない。しかしながら、次の點はむかしも今も少しも改まつてはゐない。

すなはち、農村の女房たちは、忙がしい臺所の主婦であり、子供たちの母親であると同時に、一人前の百姓でもあつて、男たちと一緒に烈しい勞働をしなければならぬ。

こゝに一番大きな無理があるのであつて、過勞からくる疾病、栄養障害、ひいて

は幼児の病弱と夭死など、こゝに大きな原因を持つてゐると云へる。そしてこの無理が何とかして除去され、解決されない限りは、本當に農村婦人の生活が改善されたと云つて威張ることができないと思ふ。近頃になつて識者たちはひろくこの點に注目するやうになつた。今日農村の協同勞働と協同炊事とが強調されるのは、やはり幾分でもこの無理から女たちを救ひ出さうといふ意圖の一つの現はれだと考へられるが、この問題については今後ともまだ／＼廣く深く研究される必要があらう。

農村文化の問題、厚生保健の問題、これらはいづれも指導的な人々に理解される必要があるばかりでなく、國民大衆によつて理解されることが大切だと思ふ。農村婦人の擁護といふことについても同じであつて、これにはやはり村の人たちが事情をみづからはつきり認識して、自分からこの運動に乗出して來なければならぬ。また婦人を擁護せよと云つたところで、これは、單に男に與へられた任務とい

ふ風にとつてはいけない。もちろん男たちにもこの問題に十分な理解と同情を持たせなければならぬ。しかし、それに劣らず、女たち自らも充分の自覚をもつて向はねばならない。

幸ひ、今日ではどんな奥村でも婦人常會がある。女子青年團がある、その他いろいろな女の團體がある。そこで女たちは農村文化、厚生保健の問題等を學び知るであらうが、特に農村婦人の擁護の重要さを、お互によく話し合ひ、理解し合ふべきである。そして女たち一同が協力するに到れば、男たちもまた協力を惜しまないであらうし、そのやうにして女たちの生活文化の改善と向上もだん／＼實現されて行くやうになるであらう。

飛驒の女たち

昭和十七年十二月三日 初版印刷
昭和十七年十二月八日 初版發行
五〇〇〇部

(出文協承認番號)
あ 260037
検 印

●定價 壹圓六拾錢

著者	江馬三枝子
發行者	花本秀夫
印刷者	東京市板橋區練馬南町一ノ三三三 小林浩齊
印刷所	東京市板橋區練馬南町一ノ三三三 株式會社日本印刷局 (東京二〇九)

發行所 三國書房

東京市小石川區指ヶ谷町百十四
振替東京一七三四七三番
會員番號一三二〇一六

配給元
日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

女 性 叢 書 目 録

柳田國男著	小 さ き 者 の 聲	送 定 料 價	十 壹 圓 六 五 拾 錢
瀨川清子著	海 女 記	送 定 料 價	十 壹 圓 六 六 拾 錢
江馬三枝子著	飛驒の女たち	送 定 料 價	十 壹 圓 六 六 拾 錢
能田多代子著	村 の 女 性	送 定 料 價	十 壹 圓 六 六 拾 錢
今 和 次 郎 著	暮 ら し と 住 居	送 定 料 價	十 壹 圓 六 七 拾 錢
篠 遠 よ し 枝 著	暮 ら し と 衣 服	送 定 料 價	十 壹 圓 六 五 拾 錢

— 以下續刊 —

945
122

98

